

# 「地域から学ぼう」

～「知床学」を通して、ふるさと「羅臼」の姿を～

学校名 羅臼町立羅臼小学校

校長名 野呂 幸生

担当者 高橋 健司

## 1 本校のESD特徴

「時代の変化に適応できるよう、個性を磨きながら人間性を豊かにして児童を育てる」をテーマに本校は教育活動を実践している。

その課題達成のために主として「総合的な学習の時間」において「知床学」を位置づけ、児童が地域の自然や環境に関心を持ち、主体的な追究活動を通してよりよく問題を解決する資質や能力を育てていきたい。そして、学びを通して、地域の誇りや課題といった、リアルなふるさと「羅臼」の姿を捉えていけるようにしたい。

そのために教育課程上に位置付けた本校の総合的な学習の時間の全体像（「知床学」を含む）が以下である。

## 2 教育課程への位置づけ

取り上げる課題		学年	内容	時数のめやす
地域学習	子どもの実態に合わせてテーマを設定し、教科で培った力を生かしながら自分なりの課題に対して主体的に追究し、解決する力を養う。	3年	自然・郷土① 熊学習・ビジターセンター・羅臼の生き物など。 羅臼展望塔の見学・北方領土関係の絵本	48
キャリア教育 (生き方教育)	地域の自然環境や社会環境に積極的に関わりながら、地域の良さや尊さに気づき、自分なりにまとめたり発信する活動を通して、将来の夢や希望を持つ。	4年	自然・郷土② 羅臼の自然環境・羅臼の歴史などを知ろう。 北方領土について知ろう(副読本)・語り部	48
北方領土学習	北方領土について、関心を持って学んでいく姿勢を育てる。	5年	キャリア教育と伝統文化 北方少年少女塾に参加	60
	施設見学を行ったり、四島出身の方のお話を聞くことにより北方領土について学び、北方領土についての自分なりの考えを持つようとする態度を養う。	6年	キャリア教育と伝統文化 羅臼展望塔の見学。インターネットで調べよう。	65
ボランティア	自分たちの生活環境に関心を持ち、身近な人々や障がいをもつ人々について考え、自分にできるボランティアを計画・実践する力を養う。	3年	親切の心を考えよう(アイマスク体験・高齢者疑似体験など)	12
		4年	お年寄りとのふれあおう(施設訪問)	12
		5年	幼稚園の子とのふれあひ(幼稚園訪問準備)	10
		6年	バリアフリーや親切の心を考えよう(車椅子体験・高齢者疑似体験)	5
防災学習	地域の防災に関する知識を備え、自然災害から身を守ったり、被災した場合、その後の生活を乗り切る力を養うとともに、「生きる力」を涵養し、能動的に防災に対応できる態度を養う。	3年	羅臼の防災について知ろう	10
		4年	防災に関わる仕事に目を向けよう	10

本校の「総合的な学習の時間」は主に（１）地域学習（知床学含む）、（２）福祉、（３）防災学習の3分野で構成されており、各学年で児童の実態に応じて実践している。

「知床学」をより具現化したものが以下の表である。

3年	自然・郷土① 熊学習・ビジターセンター・羅臼の生き物など。 羅臼展望塔の見学・北方領土関係の絵本	48
4年	自然・郷土② 羅臼の自然環境・羅臼の歴史などを知ろう。 北方領土について知ろう(副読本)・語り部	48
5年	キャリア教育と伝統文化 北方少年少女塾に参加	60
6年	キャリア教育と伝統文化 羅臼展望塔の見学。インターネットで調べよう。	65

### 3 活動事例

#### A. 熊学習

ふるさと羅臼では、クマを巡ってどのような問題が起きてきたのか。また、現在どのような課題があるのか。ヒグマとの付き合い方や出会ったときにどうふるまえばよいのか…。人とクマの暮らしが隣り合わせという羅臼町の現状を、知床財団に協力いただき、写真や映像、模型などを活用しながら学んでいった。触れる/考える/知るといった学習活動を3年生時と5年生時に発達段階に応じた総合的なプログラムで展開している。



#### B. 羅臼こんぶ学習（こんぶ図鑑をつくろう）

羅臼の特産である「羅臼こんぶ」を中心課題として学習を展開した。こんぶの生態、海川の魚、流通、川の水質の4つの課題に対し、子どもたちの興味関心に沿ってグループで探求活動を行った。羅臼漁協組合や地元漁師、流通関係者に取材するなど、地元の協力を得ながら、実体験をしながら学びを深めた。学んだことを一冊の本（図鑑）にまとめ「羅臼こんぶ図鑑 第1版」として発行し、保護者や地域、また海洋教育サミットなどで発表をした。



#### C. 外来種学習（ハチ学習）

セイヨウオオマルハナバチについて、その見分け方や特徴などを、羅臼町教育委員会の主幹をゲストティーチャーに迎えて学んでいった。外来種の侵入（過去）とこれからどう付き合っていくか（未来）についても児童たちと考えた。

#### ① 成果と課題

成果としては知床財団や漁協との連携、地域に根ざした職業に携わる方々をゲストティーチャーに招くことにより、専門的な話や資料に触れることができたり、リアルな地域の姿を見る/知る/体感することができたりしたことである。実体験を通じた体験的な学びは児童の興味関心を高めて学びを深めることができた。また、学習した内容を保護者や地域に発表することで、他者から肯定的な評価を頂き、自己肯定感の向上にもつながっている。

一方、課題としては今後教員の移動などで授業のクオリティを落とさずに、“誰でも”一定水準の内容を保証できるような授業トータルパッケージとしての教材の引き継ぎや共有化が必要なこと。学習の

変わっていくものと変わらずにあるもの。ことさら自然環境やそこに暮らす人々の営みはその両方を常に内包している。それに対応するように、授業もまた開発や精選が必要になるだろう。